ル。

著者ノ鑄造法ハ遠心力ニ基クモノデアツテ、其裝置ノ特有ナル點ハ、岡持ノ如ク鑄造「フラスコ」ヲ容ル、容器ト蓋トヲ有シ、鑄造時容器ヲ廻轉スル時、自然ニ蓋ガ落下スル如ク考案シタモノデ、容器及ビ蓋ノ内面ハ石棉板ニテ被覆シテ熱ノ放散ヲ防ギ、熔融金屬ノ急冷ヲ避ケル事ヲ目的トシタモノデアル。

合金ノ組成金屬ガ互ニ相溶解シテ固溶體ヲ生ズルモノニテハ、最初ニ熔融點高キ甲成分ヲ最も多ク含ム固溶體ガ凝固シ、溫度ノ降下ニ伴ヒ次第ニ乙成分ニ富ムモノガ凝固スルノデアルガ、此際冷却速度ガ甚緩徐ナル時ハ既ニ凝固セル合金中ニ融液中ノ乙成分ガ彌散シテ凝固ヲ終止シタル時ニハ合金ハ全體トシテ均一ナル組織ヲ有スルモ、之ニ反シテ冷却速度ガ迅速ナル時ハ最初凝固セル結晶ヲ骨子トシテ其間腔ヲ乙成分ニ富ムモノガ充填シテ、其間ニ判然タル區別ヲ有シ、成分ノ分布平等ナラズシテ不均一組織ヲ生ズト説明ガ與ヘラレテ居ル、著者ノ鑄造法ハ熱ノ放散ヲ防ギ凝固ノ際冷却速度ヲ緩徐ナラシムル事ヲ主旨トシタルモ、果シテ其保溫ノ程度ガ明カニ金屬組織ニ變化ヲ生ズル程ノ效果アリヤ否ヤ、疑ナキヲ得ナイ。著者ノ實驗ニ供シタル合金材料ノ選擇ニ統一ヲ缺キ、讀者ニ多少牽強附會ノ感ヲ與ヘル點ガ遺憾デアル。

鑄造體組織内ノ氣泡ヲ減スル方法トシテ著者ハ鑄腔ニ通氣ノ目的

ヲ以テ側管ヲ施シ、鑄腔内ノ氣體ハ鑄入金屬ニ依リ驅逐サレ、側管内ノ金屬ハ多孔性ノ狀態ヲ呈スルモ、鑄腔ハ比較的充實セル狀態ニテ充サル、ト稱シテ居ル。

猶著者ノ方法ニ依レバ義齒牀ヲ數個ニ分割シテ鑄造シ、後各片ヲ鑲著スル事ニ依リ容易ニ其作製ヲ得可ク、鞍狀鑲嵌體ニテモ亦分割鑄造セル義齒牀ノ各片ニテモ鑄造體ノ收縮ハ殆ド零ニ等シク、餘リニ大ナラザル架橋義齒ハ之ヲ分割セズ全體ヲ一時ニ鑄造スルモ實際何等ノ缺點ナシト述ベテ居ル。

固定架工義齒ニ於ケル陶材ノ應用

Porcelain its application to fixed bridge work, By J.

E. Augue D. D. S. The Journal of A. D. A. 1926

Sep. 1277 page.

固定架工義齒ニ於テ其ノ「ダミー」トシテ外裝陶齒ヲ用フル場合其ノ金裏裝ノ部ガ齒槽緣ニ接スル所ハドウシテモ非衛生的ナ狀態ニ陥リ易ク引テハ其ノ周圍ノ軟組織ニ疾患ヲ起スニ至ル、從ツテ此ノ弊ヲ避ケンガ爲メニ陶材ノ基底ヲ持ツタ「ダミー」即チ「ボーセレンボンチックス」ヲ使用スルモノガ多クナツタ。即チ非常ニ滑澤ナル表面ヲ有セル陶材ハ其ノ接觸スル齒齦部ノ組織ニ對シテ頗ル衛生的デモアリ且ツ其ノ構成上患者自身該部ヲ容易ニ清掃シ得。著者ハ陶材基底ヲ有スル「ダミー」ヲ二ツノ種類ニ別ケテ居ル。

一、基底部が齒根形ヲナシ其ノ根ノ長サハ補綴サルベキ天然齒根ノ四分ノ一乃至三分ノ一ヲ有スル。

二、基底部が鞍狀ヲナシ齒槽緣頂ニ適合スル如ク作ラル。

A、應用部位。

第一型、上下顎前齒六枚ニ限ラレ且ツ二本以上ハ同ジ場合ニ用ヒザルヲ可トス。

第二型、上下顎前齒ノ大部分ノ缺損ヲ同時ニ補フ場合及ビ大小齒部ノ凡テノ場合。

B、使用サルベキ既製陶齒ノ種類。

著者ハ上顎前齒部ニハ有釘陶齒ヲ賞用シ特種ナル維持裝置ヲ施シタル後舌面ヲ鑄造シ裝著時「セメント」ニテ接著スル下顎前齒部ニテ維持上「スチールフェーシング」ヲ用ヒ大小臼齒部ニハ有孔陶齒ヲ可トス。

C、色澤ノ構成。

使用サルベキ既製陶齒ノ色澤ガ適當ナルモノ、得ラレザル時ハ適宜ニ其ノ脣頰面ヲ改造シ新ナル色ヲ燒キ付ケル、著者ハ齒牙ノ表面ヲ齒齦部、中間部、及ビ切端或ハ咬合面ノ三部ニ分チ各部ノ色澤ヲ選ビ之等ヲ適當ナル配合ト關係ニ於テ燒ク時ハ天然齒ニ近似ノ所謂ボカシノ色ヲ得ラルト云ウテ居ル。

D、「ボンチックス」ノ作成法。

第一型、多ク拔齒直後ニ裝置スルモノナレバ拔齒前ニ印象ヲ探得シ模型上ニ於テ拔去サルベキ齒牙ヲ削リ去リ其ノ齒根部ニ相當スル所ヲ穿孔形成スル。

第二型、拔齒後暫ク經過セルモノニテ齒槽ハ吸收シ鞍狀ニナツテ居ル場合デ模型上ニ於テハ陶材基底ガ該部ニ密著スル様ニ僅カニ其部ノ石膏ヲ削リ去ル。

以上ノ如ク準備ノ出來上リタル模型上ニ於テ各々其ノ基底部ヲ燒ク。

E、支臺齒トノ連結。

第一型、拔齒前支臺裝置ト共ニ印象ヲ探得シ然ル後拔齒ヲ行ヒ該齒齒根ノ二分ノ一ヲ除去シ其ノ齒冠部ヲ印象中ニ適合シ模型ヲ作ル其ノ模型ヨリ適合セル拔去齒牙ヲ拔キ取ル時ハ拔齒窩ノ正確ナル印象ガ得ラル、此處ニ出來上リタル陶材齒根ヲ適合シ其周緣ガ拔齒窩ノ何レノ部分ニモ接著セザル様ニ形成スル、然ラザレバ架工義齒裝著後齒槽ノ吸收ヲ見ルニ至ル、次ニ支臺齒トノ接著ハ常法ニヨリ「ボンチック」ノ裏裝鈹ト鑲著スルニアリ。

第二型、基底部ヲ大體ニ於テ近遠心的ニ狹ク形成スル時ハ清淨ノ目的ト外觀的ニモ齒齦部トノ關係ガヨク見エル、支臺齒ヘノ連結ハ第一型ニ同ジ。

F、注意事項。

第一型ノ場合ハ裝著時陶材齒根ガ齒槽窩壁ニ接著セルヤ否ヤヲ精細ニ検査スル必要ガアル裝著後ト雖モ患者ヲ毎日通院セシメ該部ガ完全ニ健康狀態ニ復スル迄注意ヲ怠ツテハナラヌ。

矯正科

乳齒ノ矯正

Orthodontia of deciduous teeth. By Albert C. Holzman.

Int. Nat. of Ort. May 1928.

近來乳齒ノ咬合狀態ニ對シテ一般ニ多大ノ注意ヲ喚起セラル、ヤウニナツタケレドモ猶ホ乳齒ノ不正咬合ノ狀態ハ矯正家以外ノ齒科醫ニ依リテ屢々看過サレ勝チナノデアル。

矯正手術ノ時期ヲ失シタヤウナ患者ノ兩親カラ聞ク常套語ハ「永久齒ノ出齦スル迄待ツタ」トカ又ハ「成長スルニ從フテ自然治癒スルト思ツタ」トカ云フ言デアル。

此レ等ノ言ヲ耳ニスル毎ニ一層一般開業醫ニ不正咬合ノ早期診斷ト早期手術ノ必須ナル所以ヲ教フル必要ヲ痛感スルノデアル。

乳齒ノ不正咬合ノ診斷及ビ治療ノ重要ナル理由ヲ齒科醫學界ニ知ラシメタル功績ハ(故)ドクトル、ボーグ・ユ氏ニ負フ所ガ多イノデアル。

同氏ハニューヨーク市ニ於ケル學齡兒童數千人ニ就テ乳齒別ノ種

種ナル測定ヲ行ツタ結果左右第二乳白齒ノ舌側溝ノ齒齦緣ト接スル距離ガ二十八耗以内ナル時ハ其ノ齒穹ハ擴大ヲ必要トスルト説イテタル。又上顎兩側犬齒ノ齒頸隆線間ノ距離ハ二十三耗ヲ正常トシモシ前述ノ數値ニ達シナイ乳齒穹ニ於テハ何等カノ機能障礙ノ存在ヲ示スモノデアツテ從ツテ發育ノ阻止セラル、ヲ認ム。

乳齒ノ不正咬合ハ主トシテ扁桃腺肥大、手指吸引癖及ビ舌、口脣、頬筋内等ノ惡癖ニ基因スルモノデアツテ小兒ノ約六十「パーセント」ニ就テ乳齒ノ不正咬合ヲ認メタト著者ハ論ジテタル。而シテ乳齒列ハ將來永久齒列ノ咬合狀態ニ密接ナル關係ヲ有スルコトハ論ヲ待タナイノデアツテ著者ハ永久齒ト乳齒トノ齒牙ノ幅徑其ノ他乳齒ト永久齒トノ出齦スル部位ノ關係等ニ就テト記ノ點ヲ明ニシテ居ル。

最後ニ其ノ手術方法トシテハ極メテ纖細ナル指樣彈線ヲ使用スルコトヲ稱用シテタル。

患者ガ六歳以下ナル時ニ齒穹擴大ニ使用スル彈力線ハ十六分ノ三吋以下ノモノデ充分デアルト稱シテタル。又永久齒ノ不正咬合ハ乳齒ノ早期脫落ニ基因スルコトガ多イノデコレヲ豫防スル目的デ屢々Space retainerヲ使用シテ效果ヲ得ルコトガアル。

結論トシテ著者ハ乳齒列ノ不正咬合ヲ容易ニ且ツ何等ノ疼痛ヲ與フルコトナク矯正スルコトヲ得ルト同時ニ且ツ將來永久齒ノ咬合